

ARPA・K NEWS LETTER

地域計画・建築研究所



大阪事務所、界隈報告（その2）

ビルの谷間になった大阪天神さんの境内の梅はもうちはじめました。早い春です。池のほとりの看板のように見えるのは、明治期の天神橋にかかっていたアーチ額だそうです。

アルパック ニュースレター もくじ

- ・ 学研都市10年 奥田東先生と語る（その3） 2
- ・ 今、インテリジェントホスピタルが注目されている。！ 3
- ・ 寄稿 実験劇場とやま 富山県コロンブス計画 5
- ・ 太閤町割のおもかけを残す博多の建物 6
- ・ アルパックセミナー「都市文化とまちづくり」 7
- ・ 過疎問題シンポジウム 9
- ・ 名古屋事務所 スペース移動のご案内 10
- ・ 新刊旧刊書評紹介「小説となりのトトロ」 11
- ・ まちかど 12

NO. 34

学研都市 10 年 奥田 東先生と語る〔その 3〕

三輪 泰司

さて、昭和52年（1977年）2月5日以後、物凄く忙しい、しかし大変充実した毎日がはじまりました。

この10年、学研都市の推進から建設への時期は、いくつかのヤマがありました。

そのヤマには、大きく分けて、各界各方面の「調整」に関することと、アカデミック・プランなど、専門的な「研究」に関することとの性格の違いがあります。

この双方が互に絡み合いながら、巧みに進んでいったところに、このプロジェクトの成功の秘密があるといえます。

カベをとりのぞく「調整」の最初のヤマは、いうまでもなく、スタート・アップの段階で京都府はじめ地元と、国の関係機関、それに地権者の同意を得ることです。それは足して割る式の調整ではありません。一大イノベーション・センターの創設といった目標設定による統一も重要ですが、その根底に、カベを破るという意志がなければならぬのです。

奥田先生は、よく知られていますように、その学園紛争の時期を身をもって体験され、乗り切ってこられました。学生達がガンガンと叫ぶ中で、悠々と居眠りをしているようなといわれていましたが“学生達が言おうとしていることにも、もっともなところがある”それはカベを除くことだと洞察されました。

「いわゆるアカデミズムには、学問の進歩に役立った面もある。今後とも必要だろう。しかし学問自身が進歩した結果、新しいシステムも必要になって来た」と語られました。

ブースターに点火するカベは産・官・学の間

にもあります。産・官・学それぞれの中にもあります。それをとりのぞくには、カベの実態とあることによる意味も知ることです。できれば、気の付かない間になくなっていて、というようにもって行くのがベターです。

カベを破らねばならないと感じている人は沢山おられる「心配するな」といわれました。

奥田先生からご指示をうけてから、“これは大変なことだ、いうなれば宇宙の外惑星へロケットを打ち上げるようなものだ”と思いました。地球の引力に抗して上げるには、荷を軽くすることと、強力なエンジンを持つこと、産・官・学というブースターを束ねて取りつけることだと思いました。

世間では、奥田先生は細かいことに無頓着なように思っておられるかも知れませんが、どのような会合にも、慎重に準備を掛けられ、文章にもこと細かく目を通されます。ここにも「調整」の重要な基礎があると学びました。

1977年2月12日、非公式に京都大学の施設要望概要をお聞きしたのを最初に、会談・懇談・ヒヤリングを次々にセットしました。

元総長・学長は「権威」があり、学問と日本の将来への情報をお待ちで、しかも現役より自由なお立場です。

大阪大学の岡田清元学長は、共同利用施設の意義や運営について豊かなご見識をお持ちです。まず協力を約して下さいました。

5月4日の「関西研究学園懇談会準備会」発足へ、奥田・岡田両先生と準備活動を始めました。ブースター構築と着火目指して。

（みわ ひろし）

今、インテリジェントホスピタルが注目されている！

—京都桂病院再整備事業での実践—

北条 誠

最近インテリジェント〇〇〇流行り

最近、インテリジェントオフィス、インテリジェントシティー等に象徴されるように、わが国では、高度情報化社会を迎え、高度情報処理・通信システム・施設管理等にコンピューターやニューメディア導入が活発化している。

そもそも、国内でインテリジェントビルなるものが注目を集めたのが、1984年の東京都内での第一号のインテリジェントビル建設が発端であり、この間、数年しかたっていない（ところで余談であるは、このインテリジェントビルなるものは、正確にはスマートビルが正しく『インテリジェントビル』はアメリカのある企業の商標である）。

インテリジェントホスピタルとは

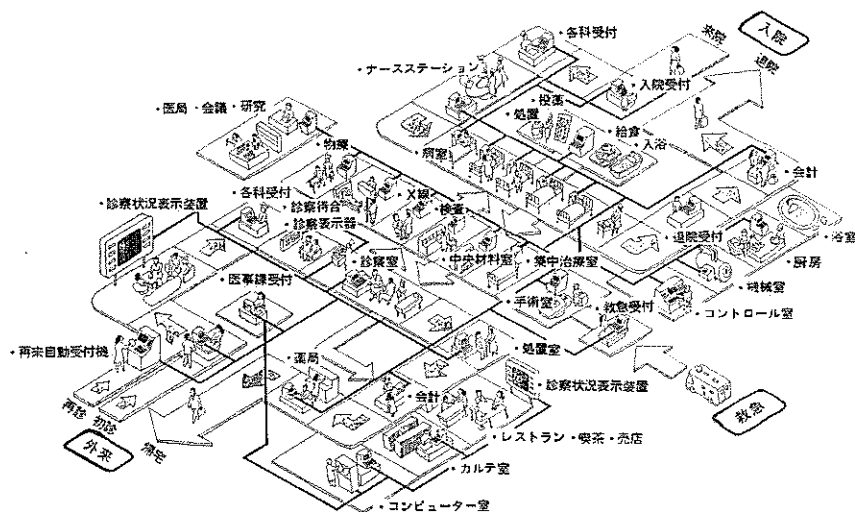
・このようななかで、近年、医療機関でもインテリジェント化の動きが活発化している。なかでも、最先端の医療機関・病院では、医師

・看護婦を含む全職員が電算機の端末を操作し、病院全体のオートメーション化に取り組んでおり、院内の全ての処方箋や指示用紙を廃止し、全てコンピューター入力によるオーダーリングシステム（発生源入力方式によるデータベースシステム）を導入している。

さらに、病院の総合情報システムへの展開をめざし、オーダーエントリーシステムや診療支援システムにまで、数年のうちに発展するものと予想されている。

このように医療機関等でインテリジェント化が注目される背景には、医学医療技術の進歩もさることながら、医療需要の増加、医学の高度化、専門家による医療機関の業務内容の多様化・煩雑化もあって、従来の人手による対応では処理出来なくなったことがあげられるが、特に、①病院内の人的合理化と情報処理の効率化、②病院内の診療部、専門部等との機能統合の必要性が増大、③院内情報の

京都桂病院総合医療情報・支援システム導入イメージ



迅速化による患者サービスの向上等の点に期待が寄せられている。

外来診療棟からインテリジェント化に取り組む

京都桂病院は、京都でも有数の大規模（660病床）の総合病院であり、京都西・南部地域の中核病院として今日まできている。

当病院でのインテリジェント化は、先にみたような一般的な社会背景とともに、近隣病院間との競争激化や医療保健制度の見直しによる医療費圧縮等、経営効率の悪化への対応。また、院内情報伝達の迅速化による人的資源の効率化とともに、患者サービスの向上に大きな効果をあげるべく取り組むこととなった。

当病院でのインテリジェント化の基本方向としては、先に述べたようなオーダーリングシステムの導入を考えており、その将来像は、図-1のような構想を考えている。

病棟（看護婦詰所、病室）、外来診療部（診察・処置室、医事・会計、カルテ室、薬局等）、救急部、中央診療部（検査室、放射線室、手術部、中央材料、特殊治療等）、管理部、サービス部等各々がオンライン化される予定である。

特に、外来診療部では自動再来受付機や診察状況表示装置、臨床検査室の30分迅速検査システム等の導入をはかり、患者へのサービス向上に努めるよう考えている。

今回紹介している外来診療棟工事は（昨年末に竣工）、あくまでインテリジェント化にむけての過渡期であり、現時点では、医事・会計、カルテ管理、自動再来受付、薬局でのオンライン化と臨床検査室の迅速検査システム、診察状況表示装置の導入に止まっており処方箋や指示については高速FAXネットワークによってサポートしている。

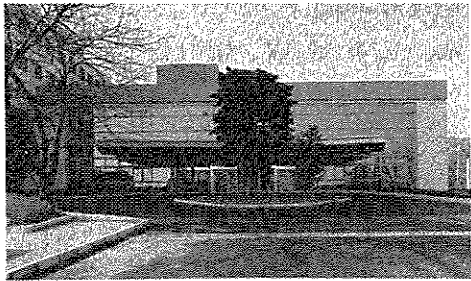
今後は、この第一段階の総括を踏まえなが

ら、第二段階以降、全院内でのオーダーリングシステムの実施、総合医療情報・支援システムの導入にむけての検討を進めていく予定である。

これからの病院はインテリアも大切

最後に、今回の再整備事業では、院内のインテリジェント化とともに、これからの病院施設の室内環境の在り方のひとつとして、メディカルモールやカフェテリアの設置。待合スペース、ロビーに絵画・彫刻の展示スペースを確保、植栽を積極的に導入する等、ゆとりとやすらぎのある環境づくりに取り組んでいる。（ほうじょう まこと）

京都桂病院外観



患者さんがくつろげるカフェテリア



外来診療棟の中心となるメディカルモール



寄稿

実験劇場とやま 富山県コロンブス計画

富山県企画調整室 山崎 正治

富山県コロンブス計画とは

例えば、皆さんが映画をご覧になる時、「役者の演技力」と「背景と音楽の構成」のどちらかが欠けていたとしたらどうでしょう。映画は、舞台装置と演技する人の両者が調和することによって、初めて人を感動させる作品となるのではないのでしょうか。

富山県は、豊かな自然、豊富な資源、高い生活水準を誇っています。しかしそれらはあくまで映画でいえば舞台です。富山県がすばらしい県であるためには、それらの舞台の上で、人々がいきいきと活動している姿が見えてくることが大切だと考えます。でも、富山県は、どちらかと言えば昔から真面目な県で、遊び・ゆとりの面ではあまり得意ではありませんでした。いわば、典型的日本の姿だったのです。

しかし、近年は、日本全体で見ると、余暇社会の到来、レジャー、リゾート、ソフト指向、カタカナ職業の氾濫…日本人の価値観が多様化し、社会の変化が激しくなっています。一方、情報、産業、ビジネスチャンス、若者の東京一極集中が近年また激しくなってきました。こうした中で、地方が生き残るためには、いかに他の地域にはない、その地域の特色を全国にアピールできるかにかかっています。「全国に誇る舞台で、人が元気に頑張っている」、富山県はそんな姿を模索しはじめました。

富山県コロンブス計画は、元気に頑張っている人を応援して、「新しい富山の顔」を作りたいと考えています。たとえば、熱気球を

飛ばしている人、アマチュア劇をやりたくて自分達で小屋を作ってしまった人、「こだわりの酒」づくりのトラストを作った人、いろんな人がいます。いろんな活動をしているグループがあります。活動内容、目的は別々でも、自分達の仲間の輪を広げたい、いろんな人と話したい、という考えは同じ。「自分達だけの輪ではできなくても、もっと仲間が増えればできる」そういう仲間を富山県コロンブス計画は後押しします。富山県コロンブス計画は、そんな、地域で活動している人やグループに「イベント」という、とっつきやすい題材で、富山県が元気になる方法を考えてもらおうという事業です。

名前は、未知の大陸を目指して船出した「コロンブス」…新しい、富山県にとって未知の事業の開始への意欲を示しています。シンボルマークは、「コロンブスの卵」…たまごが割れて新しい富山が誕生するかもしれない期待感と、立山の姿、そして、富山県が進めている「健康・スポーツ」、「花と緑」、「科学・文化」の三つの日本一への挑戦を表現しています。

これまでの活動

(1) グループ発掘、面談

まず、県内にどのような役者がいて、どのような活動をしているのかを知るため、新聞等で紹介されたグループと面談し、コロンブス計画の説明と、協力を頼みました。

この面談グループは、現在約 100 グループに達しています。

(2) ティーチインの開催

発掘したグループのネットワークを図ることと、コンペの募集要綱を作成するため、ティーチイン（小人数の討論会）を開催しています。一泊で、酒を飲みながら、気楽な雰囲気です。このティーチインは、今年度6回開催します。

(3) 情報の発信

コンペに応募されたシナリオの実行部隊となるべき、県内のグループ紹介を、文芸春秋を使い、63年7月号から計10回の広告を掲載するほか、各種メディアを使って情報の発信を行っています。

今後の予定

(1) 県民参加型イベントシナリオコンペティションの実施

63年度の活動をもとに、募集要綱を作成し、今年4月から、全国に向けて、より多くの人が参加できるイベントシナリオを募集します。

この募集については、新聞や雑誌（文芸春秋、公募ガイドの5月号）でご案内します。ちなみに、1等（特選）の賞金は、300万円の予定です。

(2) イベントの実施

コンペに応募された作品の中から、県民参加型イベントとしてふさわしいものについては、実施を検討します。また、これ以外にも、各グループが自発的にイベントを実施することも期待しています。

富山県の新しい顔づくり

このような過程を通して、富山に住む人達が自らの地域を考え、「住みたい県」づくりがなされることにより、全国どこにもない、富山県独自の顔づくりをしたいと考えています。

（やまざき しょうじ

ホットライン（0764）41-2100）

山崎さんにはご寄稿いただきありがとうございました。

さんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況

太閤町割のおもかげを
残す博多の建物

山田 龍男

現在の福岡市は市内の中央部を南北に流れる那珂川を挟んで東の博多、西の福岡というように、その性格も歴史も大きく異なる町が一緒になったものです。特に商人の町である博多の方を歩いていますと間口が狭く、奥行きが長い、いわゆる「鰻の寝床」といわれる宅地や建物が目に止まります。

このような街の形態は約400年前、「太閤町割」といって豊臣秀吉の命による町割が行われたことにはじまり、その後、戦災復興および博多駅移転に伴う2つの大きな区画整理が行われましたが、が行われましたが、「太閤町割」をベースにしているため各宅地の形状は原型をとどめています。

ちなみに博多の町割は、街区単位ではなく、

道路に面する両側の宅地を基本とした町の構成となっています。これを「流」といい、山笠などの何々流という名に残しております。

写真は博多駅のすぐ近くにあるもので道路拡幅に伴い、宅地が削られ、さらに間口が狭くなったところに建てられたものです。正面（昔はこちら側が横）からみると大きなビルを連想させますが、横からみると1番狭いところで2～3mしかありません。用途は1階事務所、2～3階住宅になっているとのこと。

（やまだ たつお）



アルパックセミナー

「都市文化とまちづくり」

望月 照彦講演会から

昨年(1988)の12月3日に、アルパックセミナーを開催しました。当日は、都市計画家の望月照彦氏に講師をお願いし、「都市文化とまちづくり」というテーマでお話ししていただきました。ここにそのセミナーの要旨をご報告させていただきます。

都市づくりの発想の今後

今後やわらかい発想をしないかぎり都市デザインはできないのではないかと考えている。例えばこの大阪についても、今後の日本の世界経済への役割を考えるとアジアに目を向けたアジアマートのようなことを考える必要があると提案したことがある。

1つの都市をつくるにはビジョンがいるし、都市計画は大きな発想をもたないとデザインができないのではと考えている。こうした傾向は、都市づくりに既存の都市計画家でなく、政策をもった別の人を登場させ、職能の構造をかえていくかもしれない。

屋台オロジー

昭和30～40年代に都市づくりを学んだ。その頃は、丹下健三さん、西山卯三さんなどによる都市づくりの黎明期でビッグプロジェクトの時代だった。なるべく大きな構想を出すような傾向があった。しかしデザインはrippadaが、問題が多いようにもみえた。

その後、大手デベロッパーに入って、団地計画などをやっていた。その中でいろんな施設がつけられているが、本当にそれでコミュニティができるのだろうかと思問だった。そこでいろいろ利用調査したがやはり利用され

ていないものも多かった。

ある日団地に「焼きいも屋(屋台)」がきて一声かけると人がわっとあつまってくるのを見た。それを一つの契機として浅草、新宿の屋台調査をはじめた。銀座にも調査にいった。そこにさぬきうどんの屋台があって、大阪からきていた。その成果をまとめて、屋台で都市を再構成するような提案を出した。(「屋台の都市学的序説」)これはその後屋台オロジー、まちノロジーへとまとめられていくものである。つまり、これまでの都市計画家が省いていたものをもう一度みなおすことをやった。それまで屋台、のみ屋は都市計画のガンのようにみられていた。

都市民俗学

都市づくりは、「都市での生活」を考えないではできないと思う。都市民俗学は都市をつくるのに不可欠なものだと考えている。これはまた、既存の都市計画をひきあげることにもなる。

そもそも民俗学は世界に誇る日本の学問であり、自立的な学問である。しかし、現代の社会構造上の問題に必ずしも迫っていないようにみえる。柳田民俗学の成果を自分の都市づくりに生かしていこうとの観点から都市民俗学をはじめた。現代の都市の生活スタイルや習俗を考えていこうとしている。

例えば著書「都市のロビンソンクルーソー」では、1人1人を都市にたどりついた漂流者と設定して、都市にすむスタイルを提起している。今後個人のために都市をつくる発想が大切になるのではないかと考えている。

〈事例として〉遠野市と新遠野物語

遠野市は人口3万人の市だが、このまちづくりに参加することになった。

まちづくりを考えるにあたって、はじめに、このまちは、柳田民俗学—世界的地域民俗学—のきっかけをつくったまちだと考え、遠野を考えることは世界の中でのまちづくりを考えることだといった。

地域の問題は過疎、過密の問題でなく考えることができる。遠野をそういった問題とはちがった形で語るができると思った。3万人～10万人の人口規模のまちづくりは世界的な問題であり、トーンロジャーをやることは世界のコミュニティの規範になると話した。

具体的には、「新遠野物語」をやろうと提案した。21世紀の遠野物語をみんなでつくろうと提案した。21世紀の生活の話をやって、それで今何をするかをまとめた。

清水市とマリンバンクシティ

自分の生まれは清水市である。人口は30万人弱のまちであるが、産業的には構造不況となっている。ここで何をしたらいいかということで、全国少年草サッカー大会がはじまった。少年チームが全国からきてファミリーで交流することにした。また補欠もボールにさわらせることにした。文化がベースとなって地域おこしにつながっていき、新しい地域がつけられていく。

また清水はかつての港湾都市であり、今計画としてウォーターフロント計画があった。しかし全国的に同じ計画づくりされているので、ここでは、別の「マリンバンクシティ」の提案をした。

これは、海洋資源がみなおされているので、海を総合的に育成、監視し、データあつめをする施設などを中心としたまちづくり構想であった。今まちづくりにはポリシーを出すこ

とが必要である。

北九州市とメディカルリゾート

北九州市は重厚長大型都市の典型である。

ここでメディカルリゾートセンターの構想を提案した。それは、北九州は病院が多くて過当競争になっていることが1つの契機であるが、今の時代は半病人が多くてそのケアが必要な時代なのではないかと考えていたからである。リゾートと体を直すことを直結し、それに医療機器生産の企業が参画する構想であった。このコンセプトにいろんな企業が投資したいとって研究会ができて、企業連合がつくられていく。

小田急学会

アメリカの大都市では、周辺にアーバンビレッジとして自律都市が100個ぐらいできているものがある。テクノロジー、コミュニティ、リゾートが一体となった地域があった。日本ではどうなるのかと考えた。

新宿から小田原まで小田急沿線には62の自治体があり、特色ある地域である。ここで世界最高のコミュニティモデルをつくることを考えた。コミュニティづくりの推進組織としては、地域を対象とした小田急学会をつくって、比較的自由なテーマ設定をして活動することにした。

講師をお願いした望月先生にはお忙しい中誠にありがとうございました。参加された方々にも、盛況のうちに終えられましたことを紙面をかりてお礼申し上げます。

(編アルパックセミナー事務局)

過疎問題シンポジウム

鶴飼 奈弓

ARPA・Kではこれまで、過疎問題をはじめ、市町村や広域圏の様々な問題に取り組み、また地域の活性化にかかわってきました。

このところ、「地方」を見直す傾向とともに地域おこしの活性化がみられるなか、過疎問題に新しい側面が現れつつあるという問題意識のもとで、最近の過疎市町村の全国的動向を把握するため、『第一回過疎問題シンポジウム』に参加してきました。

シンポジウムは過疎市町村を多くかかえた鹿児島県において、昨年10月29～31日の3日間にわたり自治体関係者等約1,500人の参加のもとに開かれました。1日目と3日目は全体会議、2日目は3グループにわかれて分科会が行われました。

ここ数年、大分県の一村一品運動をはしりとする、特産品づくりによる村おこし町おこしが全国各地で盛んになってきています。しかし、「つくるは易いが売るのは……」の言葉のとおり、「売れる」ための商品開発や宣伝活動、流通・販売の戦略など、工夫し改善しなければならない問題は山積しています。このように、特産品づくりだけでの地域おこしは大変難しくまた投資によるリスクも大きいため、最近は、もっと違った角度、例えば

過疎地域事例発表



文化や伝統、人的交流、地域基盤の整備や開発といった手法も併せて考えられるようになりました。しかしこれらの方法については問題点ももっと漠然としており、まだまだ研究の余地があります。こういった岐路に立っている状況の中で、将来に対する自治体や各種団体の真剣な取り組みを通じて、新しい過疎法を制定してほしいという現在の過疎市町村の切実な願いを確かめ合ったこのシンポジウムは、同じ課題に取り組む人々にとって大変意義の深いものであったと思われます。

▷第1分科会 (桃園 和徳)

「若者が住みたくなるまちづくり」をテーマとした分科会でしたが、地元加世田市及びその周辺の人々の参加が少なかったことや、パネラーである若者(20～30代)に対しフロアの大人(40代以上)たちが答えを問うていることに深刻な問題を感じました。特に印象に残ったのは、男性のひよわさに対しての女性のたくましさで、彼女達の、農山村と都会の両方での生活体験を踏まえた中での発言には重みがありました。「農山村の男性よ、自分に魅力を持って、地域を誇れるように創り変えよ、そうすれば自ずと、道は開かれる。」と言っているようでした。

▷第2分科会 (鶴飼 奈弓)

鹿児島市の北約20kmにある宮之城町に於いて「はまってやんそや むらおこし」というフォーラム「ミニ独立国のむらおこし」

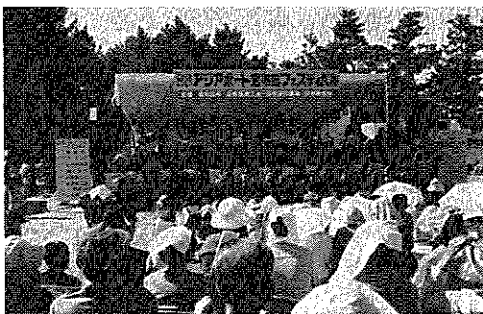


タイトルで、自治体や有志団体によるミニ独立国の代表者が中心となり、イベントから商品開発・販売等について、ユーモアあふれる解説や裏話・苦勞譚の披露があり、それに対して場内からはさかんな質問がなされて盛況でした。とくに、独立国の代表者の方々の奇抜なコスチュームや、宮之城チクリン村のかぐや姫の十二単衣姿が好評を博していました。

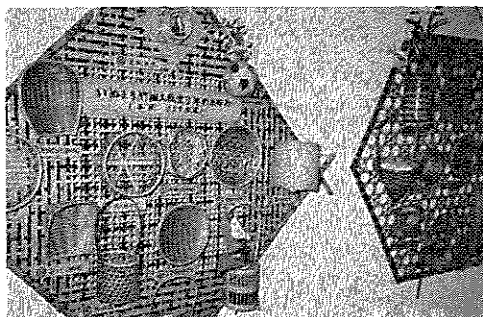
▷第3分科会 (高橋 光雅)

会場となった志布志町は、「新全総」で位置づけられた国の石油備蓄基地の建設が進むとともに、配合飼料会社であるカーギル社の進出等で有名な港町です。分科会に先立って、町青年団が7年前に結成した劇団により過疎をテーマとした劇が公演され、参加者たちに大きな感動を与えてくれました。「交流」をテーマとした分科会では、都市との交流、過疎地同士の交流、国際的交流等を通じての地域おこし事例の発表と意見交換がありました。(うかい なゆみ)

'88 アジアポート志布志フェスティバル



宮之城伝統工芸センター(竹の文化の創成)



名古屋事務所

スペース移動のご案内

今回 部屋を変わります。

少しオフィスらしい環境になります。

そこで、今回思い切ってイメージチェンジし、2部屋を1部屋にし、少しインテリジェントなオフィスらしい環境に変えることにしました。

場所は同じビルの2階です。

変えると言っても、同じビルの6階から2階に移るだけですが、面積は今までの2部屋で約30坪から、一気に1部屋で52坪に拡張する事としました。

移転は2月20日からです。

たまたま部屋が空いたので、仕事の整理が着く年度空けまで、待ってもらえず、急きょ変わる事となりました。アルパック名古屋も丸6年、7年目に入ります。これまでの御厚情の感謝を含めて、年度明けに改めて紹介の案内を致します。

都市交流サロンを充実します。

これまで御愛用いただいている都市交流サロンを充実し、もっと使い易い環境にします。参考意見を頂ければ幸いです。力不足を補うべく、今後も努力していきます。

〈おわびと訂正〉

前号(1989年1月1号№33)の表紙において、写真の裏表が逆になっておりました。また、施設の名称「橘女子大学学生会館」は正しくは、「京都橘女子大学学生会館」でした。ここに、おわびと訂正をさせていただきます。(編集部)

旧刊新刊書評紹介

原作絵 宮崎 駿
文 久保つぎこ 徳間書店

「小説 となりのトトロ」

紹介 藤田 武彦

この「となりのトトロ」は昨年映画としても上映され、またビデオでも売り出されているそうである。実は筆者がそのいずれも見えておらず、最近本屋でこの小説を手にした。

ストーリーは実に簡単なもので、昭和30年頃都会ぐらしの学者一家が田舎に引っこしてきて、そこでの生活（都会の生活との比較も加えながら）を描いている。しかし、それが単に昔話や童話になってないところにこの小説の魅力があるように思えた。

その1つの理由は、この小説が読者層（多分昭和20年代生まれを主にして）の子ども時代の風景、つまり原風景を描こうとしているようにみえることがあげられる。

幾人かの事務所の人と話しても、それぞれ生まれ、育ちはちがうのに、妙にこの小説が描こうとしている風景には、見覚え、聞き覚えがある。ふしぎな小説である。

また、この小説には「におい」「音」がやたら文中に登場してくる。「うす暗い森のにおい」「日なたのにおい」、いろいろな雨音、風の音など。逆にこれらのおいや音で古い共通の昔を思い出す手掛りとしているのかもしれない。

この主人公は子どもたちである。そしてここに登場する子どもたちは、田舎の生活がすぐ気に入ってしまい、また田舎の友だちが身につけている生活の知恵にすごく感心する子どもたちである。その素直さは今や何か意外なもののようにみえる。ひよっとすると、作者はこの時代から30年たった読者に問いかけ



ているのかもしれない。——今でもあなたはそうですか。

筆者は、最近、子どもの頃育った所の近くを通ることがあったが、そこに昔のまちの姿はなかった。風景もなかったし、なつかしい人間もいなかった。それでもふるさとなのか。

地域づくりの仕事をしていると、いろいろ「となりのトトロ」で感じるような原風景に人間関係も含めてよく出合う。それらをかかえて仕事できるところが自分の仕事のいいところかもしれない。いろんな地域に縁が出来て、ふるさとが新しくできてくるのではなからうか。

最近「ふるさと論」「リゾート論」がさかんであるが、その中でもっと原風景のことについても議論があっていいと感じている。トトロはそれを教えてくれるかもしれない。

（ふじた たけひこ）

まちかど

京都の仮囲い

鶴飼 奈弓

京都の家——といわれて誰もがまず思い浮かべるのは、ベンガラ格子・むしこ窓のいわゆる「鯉の寝床」なる町家ではないでしょうか。しかし、京都事務所のある四条・烏丸一帯は証券会社や銀行をはじめとするオフィス街となり、特に烏丸通りは高層建築も含めてオフィスビルが建ち並んでいて、それも未だに増えつつあります。

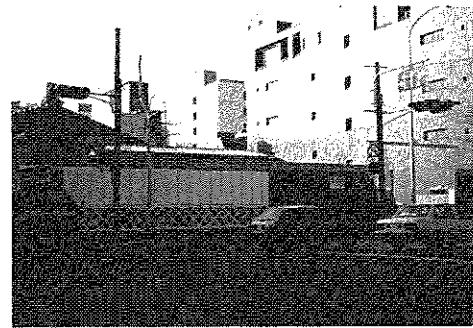
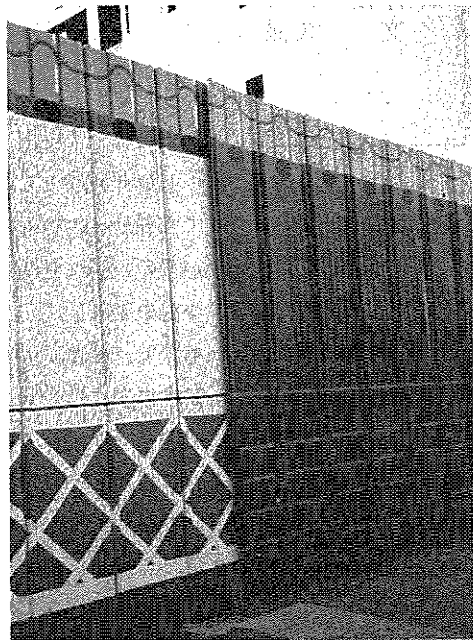
ところがそんなビルの谷間で2階建ての取り壊し作業が始まり、みるみるうちに京町家が出現！と思ったら現場用仮囲いだったのでした。その隣にはなまこ壁の意匠の仮囲いもあります。

芸術家や付近の子供たちを使って仮囲いのペインティングをする例はしばしば見られますが、町家というところに、そして環境に対する気配りに京都を感じさせられます。

以前にも祇園あたりの四条通りで京町家の絵をかいた仮囲いが出現した際に、「町家を壊してビルにするのにどうしてか」と批判する声もあったそうです。

さて、みなさんはどう思われますか。

(うかい なゆみ)



ARPA・K (株)地域計画・建築研究所

ARCHITECTS, REGIONAL PLANNERS & ASSOCIATES, KYOTO

本社	☎ 600	京都市下京区四條通り高倉西人ル立売西町82 (大和銀行京都ビル8階)	TEL (075) 221-5132(代) FAX (075) 256-1764
京都事務所	☎ 540	大阪府中央区石町1丁目1番1号 (天満橋千代田ビル2号館)	TEL (06) 942-5732(代) FAX (06) 941-7478
大阪事務所	☎ 460	名古屋市中区丸の内3丁目18番30号 (ツボウチビル2階)	TEL (052) 962-1224(代) FAX (052) 962-1225
名古屋事務所	☎ 402	東京都港区芝大門2-3-14 (一松ビル1号館402)	TEL (03) 437-3405(代) FAX (03) 437-3407
東京事務所	☎ 810	福岡府中央区天神1丁目15番1号 (日之出ビル6階)	TEL (092) 731-7671(代) FAX (092) 731-7673
九州地域計画 研究所			